

● 高澤良一 第三句集 さざなみやつこ

● 夏

めんどくささうに吹かれて花しやうぶ

一八のひよいと咲いてるまひるかな

半島に足を伸ばせる鰹どき

金網を這ひずりまはる時計草

立あふひ東海林太郎をおもふべし

水捌けの悪きを著莪に好まれて

野あやめの妹分の著莪咲けり

あぢさゐの咲きためらへる花のいろ

寺男朝な手古摺る夏落葉

あぢさゐ同期生の極まる色も見ず逝くか

濃あぢさゐ男色の粹尽しけり

あぢさゐののっぺらぼうが庭木かけ

十葉の森の何処より手をつけむ

うつむいて庭の十葉引一途

黄鸝来て溪流見通しよき処

ねずみもち花のまはりのまだ昏れず

がやがやとほたるぶくろの辺を通る

破れ傘大分しっかりしてきたる

栗切る手際宜しも甘野老あまどころ

転勤を小耳に挟むゆきのした

もめごとの外に洩れをり鴨足草

人のあと宝鐸草の花こづく

菫の花とまどひがちに雨降れる

ゼラニウム赤き愛車を洗ひをり

からまつの間の一樹の夕若葉

山若葉こんもり朴の木もあらむ

あかときの新樹の樹頭冷え居らむ

楠若葉神馬のけぞるごとく揺れ

新樹林木の性質たちのこと話しゆく
御柱その盛土もさみだるる
照り合うて拝殿おほふ楠若葉
若葉雨日照雨にかはる御神域
洗濯機朝から始動こどもの日
けふの昼餉冷素麺に一致して
緑蔭のベンチあそこが空いてをり
サイクリスト緑蔭に汗拭へるも
五月雨の降り込む椎と槓の間
道灌の墓五月雨を聴くばかり
早苗の上農兵節の富士現るる
苗はこぶ南安曇野曇りかな
今にして躑け足らざることもの日
若楓煽られしどろもどろかな
ほんのりと枇杷に自祝のおもひあり
枇杷にのる色の散漫また降り
公理より定理導く雲母虫きぼら
一つ咲きうしろ向きなる夏つばき
柿の木の雨にからきし弱き花
梅もぎの擦り傷此処とことここ
青梅の真夜の土打つ音ならむ
雪溪の端まで二三歩ふきのたう
いつぽんの水道局の桐咲けり
雲冷えてひとりごころの桐咲けり
指し示すゆびにあつまる朴の花
目を戻し再び天の朴の花
花くるみつめたき雫こぼしけり
何か実のやうな花付けポポーの木
教会の三人掛の梅雨木椅子
青梅雨に集へる信徒魚族めく

徴まじくパイプオルガントツカータ
ケルル作曲「カツコウによるカプリッチョ」
くわくこうの声出すオルガン奏者かな

梅雨晴間壁に凭るるぬひぐるみ

植込みを打ち始めたる男梅雨

でで虫も其角の墓も傘の内

鴉の巢こゑから推して二羽はゐる

子を産んで杜の鴉の都合五羽

あめふらし雨虎花魁道中歩きせり

比類なきオトメウミウシ捕らへたり

つまみ上げ大海牛の段袋

アクアミュージアム鼻つ先エイのフリルを戦がせて

初対面紋付剥と申す者

チヨウチヨウウヲ吻吻云うて泳ぐなり

棕櫚の花雨に散けて落ちにけり
ぼら

浦島草釣糸垂れてむかう向き

日の盛かすがひ鎚打たる仁王の脛
てんとうむし娘

てのひらに這はせて愛づる紅

三羽目の青葉木菟の子洞を出で

菱形となりて大瑠璃駆くるそら

吹き降りの雨の降り込む鴉の巢

子鴉の分際にして威嚇すか

葭切の長寿長寿と朝朗
ほがら

ニタ三搔き樹影を出づるあめんぼう

空元氣出して晦日の水馬

あめんぼうの氣紛れ歩きぶつかれり

あめんぼう足投げ出して中休み

あめんぼう脚のさうじにかかりけり

だしぬけの雨に臆しぬ水馬

掘り返して団子虫やら蚯蚓やら

ごきかぶり御器嚙追ひ詰めおいて助け呼ぶ

ががんぼの空中飛行見下ろせる
ががんぼのせうことなしに玻璃せせる
もう我慢出来ぬぶん縮出せり
木雫の音を聴きゐる華奢な露
ずばぬけて櫂のみどりよかりけり
老人が出て来て朝の薔薇剪りぬ
立て続け降る雨薔薇を砕きけり
ジキタリス花筒の中にもかくもの
橘大野林火全集のかをるが如く上木す
美丈夫の梧桐の幹打ち振ゑぬ
夏の日をさへぎる櫂にして偉なり
こころもち幹を振りて夏櫂
チューリップツリー並木を南風馳せ
広重の人馬ふためく夏の雨
はたた神空を鳴らして空開き
いなびかり大海原に珊瑚樹に
うなばらを押へつけたるはたた神
十歩出て左方に海や雲の峯
天を突く気なき峯雲は斥けむ
結実果実温室中カカオ色なるカカオの実
目に入りて拳大なる青パイヤ
パイヤの青果押し合ひへ押し合ひて
パンの実の何処にとあふぐ夏帽子
黒揚羽追ひゆく別の黒揚羽
蹠にはつなつの砂返りけり
夏川の瀬に廻り込む水迅し
滝落下点へゆつくり向ふ水
靴の泥こそぎ落せば行々子
真向へる男滝じりじり詰め寄れる
青き幹じりじり暑くなりさうな

臍切れてよりの暑さと書き添へて
家の中一巡りして暑がれる
炎天見る武人埴輪の面持ちに
白雨に舗道応へてをりにけり
夏の夜の力道山にこゑ囁らし
誇張して夕焼空を彩れる
炎帝の隙ついて風生るなり
カウアイ島巡りの夏帽買うて来ぬ
夏帽子壁炉の上に誰のもの
山荘の板敷素足よろこべり
葭切の黙ればはたと照りつけぬ
コリント式噴水の水柱かな
突風に噴水のすぐへこたれて
安居寺廁草履のうすべつた
大疑堂竜沢寺坐禅堂覗く俗頭涼しけれ
御旅所に団扇と扇子語らひつ
団扇風みぞおち辺り汗に冷ゆ
文庫本伏せて麦湯を飲みにゆく
やつと手の空きし妻来て心太
売店へ空のラムネの壇戻す
ひよつこりとラムネのおくび出で来たる
大仏をまづ先に見て氷水
長かりし一日ビールの黄昏色
海水着踏みつけて浴ぶシャワーかな
請雨経宋版某々竜王づくめかな
午睡して妻の背ひろびろとありぬ
虎尾草とらのをの風に払子を振るごとし
夏草を手折り夏草搏ちゆけり
うげんの繰出し吹ける青き空
若死とおもふのうぜん散るにつけ

のうぜんの落花を蟻の離れざる
花とべら海匂はする風が吹き
海桐の香つよく干潟を押し出せる
蓮巻葉風にほぐれてジャンクめく
蓮の葉のさつと開いて風通す
蓮に雨素通りといふ通り方
莫迦でかきオオオニハスの葉の置き処
朝顔のうなだるる葉に水遣れり
朝顔の小っさうなつて咲きつづけ
靦面てきめんにその葉畳める含羞草
夏萩のすんなり風を受け入れて
極楽寺百日紅の夢見時
さほどにはあかくはならぬ百日紅
つきあたり百日紅の極め付け
茂みより一羽飛び出す葉っぱいろ
西瓜置く場所を最初にこしらへて
西瓜種ほじくる種のうしろにも
クレッシエンド、デクレッシエンドの散松葉
仙人掌に侏儒の咲かせる黄の小花
避暑客のたてこんでくる小海線
熔岩積みの熔岩の間よりすいと百合
向日葵の茎は棍棒火山灰大地
ちよんちよん
と夏櫛紅葉したりけり
白檜曾の幹を好める霧が出て
霧の中四五歩先ゆく妻の肩
一団の霧に突き上げらる霧も
日光黄菅霧の向うの霧を見て
取継る蝶もニッコウキスゲ色
夕菅の霧を素早く技けし色
一目見て薄雪草と断じけり

車百合蝶をくるりと返しけり
くりくりの空があるなり吾亦紅
ほうたるの独りごころの灯を提げて
くさむらに転げ込んだりほたる火が
目の前をずんと明るき蛍過ぐ
ひめぢよをん偶さか雨に搏たれけり
夏送るころにアディオス・パンパ・ミア
川の音ほたるさっぱり出なくなり
穴を出て小蟹疾と疾とと駆け出せり
砂蟹の穴に押し入る無理無体
つままれて脚硬ばらす磯屑蟹
磯屑蟹打ちて雨脚強くなる
沢蟹の脚すりぬけて奔る水
沢蟹の桔梗いろの肯を押ふ
目の遇ひし蟹が脳裡にちらつくも
一茎を両手で押へ糸とんぼ
蟻地獄扱も根気の要ることよ
船虫散る活路開けるごとくなり
およそこの世に与し易きはうまづらはぎ
かははぎの目の後退を何とする
梵秋篠寺天の御衣夏めく安佐美止利
蛇動物園の衣懸けあり蛇の遊び木に
官軍の錦蛇とはもつともな
目を宙に標本擬まがひの大蜥蜴
蟻喰ひの悲願適ひてよく伸ぶ鼻
ベンガル虎風死す檻を往き来せり
走鳥類エミュー目を伏せすずかぜに
北極熊棒立ちの涼ふりかぶる
蝙蝠の躰鈍なまれば飛びにけり
寝返りを打ちつゝ蝉のかすれごゑ

鉢植の棕櫚竹ともども暑に耐へむ
また鳴きて蟬は古きに泥むごと
おぼつかなくなりし日差しに愚図る蟬
拾ひあげ蟬の茶羽根を広げみる
心経の皮切りに似て朝の蟬
銭亀のいづれ遜色無かりけり
まくなぎのしつちやかめつちやか払ひけり
利かん気な飛び方をせる蚋一つ
この辺の何処かにサザナミヤッコの本
打ちもらす蠅の行方を追へる顔
かはほりに油ッ紙のやうな空
かうもりの翼電動仕掛かな
青故郷法事一つに繋がりにて
ものかげに昼やりすごす大馬陸やすで
上背ある次男と土用鰻食ぶ
ひさびさに腕が鳴るなり蠅叩
蠅叩き難にくければ肘折り曲げて
樟脳の気落ちして夏逝けるなり
はりきり草しほたれ草や夏深み